

令和7年度 第1回 学校運営協議会 議事録

日 時 令和7年5月9日（金）午後2時00分から3時30分まで
会 場 ふじのくに国際高等学校 情報コミュニケーション演習室
出席者 委員3名中2名出席

1 校長あいさつ

・学校運営協議会について

静岡県では、令和7年度までに全ての高校で、学校評議委員会から学校運営協議会へ移行する。学校評議委員会と違い、学校運営協議会では、地域の方と一緒に学校運営をしていく方向で進めていきたい。

・IB コースについて

現在、国際バカロレア教育機構の IB 校認定に向けて、職員の研修、施設の整備など、必要な作業を実施している。IB コース希望者は、12 月まで文部科学省が設定する必修科目を履修し、1 月から本格的に IB の授業を履修する。

2 学校運営協議会・ふじのくに国際高校の様子について

教頭が、今年度から始まった学校運営協議会について、文部科学省の資料を基に、昨年度の学校評議委員会と比較して説明し、続いて、今年度のふじのくに国際高校の様子について説明した。

3 授業参観・校内散策

IB コース希望者が受講している言語文化の授業を参観。校内散策は、今年度改装され使用可能になった A 棟（本校北側の校舎）を中心に、特徴的な施設、教室等について紹介した。

4 学校経営計画の概要説明

校長が、令和7年度ふじのくに国際高等学校 学校経営計画について説明した。

5 グループ協議

(1) 地域連携（出席者：委員 A、本校職員 6 人）

職員 A：総合的な探究の時間については、入学年次は、地域の魅力発信プロジェクトを行う。今年度はどのようにやっていくべきか、昨年と同じ人をお願いするか、他の方にもお願いするか、悩んでいる。

中間年次はマイプロジェクトを行う。will/can/need のバランスを考えながら、5 月からは need の部分を気づかせる活動をする。地域課題については島田市や商工会にも紹介してもらっている。

それを踏まえて、10月からはマイプロジェクトを進める計画を立てている。大人の視点が必要なので、相談会等コーチングの機会を考えている。協力していただける方、相談にのっていただける方がいれば紹介してほしい。

教 頭：今の話にもあったが、昨年度も地域の方達に本校の探究活動の携わってもらった。委員Aには昨年度1年間に関わっていただいたが、どのような感想をお持ちであるか。また、他に関わってくださった方々はどのように思っておられるか、こちらも伺いたい。

委員A：参加させてもらってよかったと感じている。他の方も、自分の会社の在り方、今後どうやっていくかを考える時間になったと言っていた。参加した方以外にも、出たいと言っている方、また紹介したいと思っている方はいる。

委員A：11月3日に夢づくり会館で「おし祭り」を島田市商工会が中心で行う。私が実行委員長をやっている。内容は未定であるが、ふじのくにの生徒さんも出店したり、地域の方にインタビューしたり、学校の宣伝のブースを構えたりすることができる。

職員A：生徒の活動の発表ができれば何でもよいか。祭りに出る生徒は先行してテーマを進める必要がある。夏休み前には、おし祭りの相談ができたらいと思う。

職員B：入学年次の成果物は学校で印刷して冊子にしているが、どこかとタイアップして、業者に印刷してもらうことは可能だと思うか。前回携わった地域では、市から補助金が出て、そのお金で発行をしていた。成果物を販売している学校もあった。地域のPRにもなると思う。よい物ができたので、狭い範囲に配布しておしまいほもったいないと感じている。

委員A：周知すれば、冊子に載りたいという人も出でくると思う。スポンサーを募るのもありだと思う。学校として良いかはわからないが、スポンサーを募るのは、企業ではよく行う。

事務長：公費で行う場合、スポンサーを募るやり方はあまり聞かない。継続的に行っていけるよう、方法を考えてみたい。

職員A：地域課題を聞いてからフィールドワークに行く間の活動については、事業所についてネットで調べるだけでなく、図式化・構造化して深めたい。事前学習の仕方悩んでいる。

委員A：一つの企業について深堀することはできると思う。

職員B：生徒には、複合的な要因で課題が起こっているということを、自分事としてとらえてほしいと考えている。

(2) 学校評価（出席者：委員B、本校職員6人）

副校長：評価に繋げていく方法として、アンケートを行うことが多い。他に評価方法として効果的な方法はあるのか。

委員B：どの部分を見るのか、尺度によって異なってくる。生徒の出欠などは、数字で見えていくことは効果的である。教育現場では、単年度だけで見ていくことは難

しい。数字と合わせて別の尺度を出して、「学校評価としてこうしていく」と示していくとよい。今後、生徒数が増えてきたとき、中学校からの評価はどうなっていくのか、追っていく必要があるのではないかな。

委員B：ふじのくに国際高校は普通の学校とは別の機能、期待が寄せられている。フレキシブルな3部制の定時制であることは、そもそも多機能である。さらにIBも行っていくためには、先生方がある程度理解していないと難しい。しかし、公立高校がやることに意味がある。生徒が自分の状況に合わせて学びができる学校になるといい。県内の他の3部制の定時制高校では、開校当時倍率は2倍程度あったが、その後、志願者が徐々に減少した。選抜方法に自由表現があり、入学選抜にも特色があった。それだけが原因ではないと思うが、地域(中学校、保護者等)に学校の特色を理解してもらうことは非常に大切なことである。

職員D：地域にIBを知ってもらいたい、地域的に人口的にも少ない。また、IBは全員に合うプログラムではない。そのため、従来の授業スタイルに合わない生徒に浸透していけば、意味があるのでは。認定が取れた後アピールしていきたい。

校長：様々な方が学校を実際見に来てくれたことが、よかったのではないかと感じている。生徒たちが、本校の学習内容にマッチして、生き生きと学んでいる姿が印象的だったようだ。実際の授業の様子を見ることで、来校者も印象が変わったようだ。実際見て感じたことを、伝えて広げていってもらえたらありがたいと感じている。昨年度、来校した方々は、生徒たちがここで学びたいということが強く伝わってきたとおっしゃっていた。見に来てくれた方が生徒の様子を伝えてくれることが、広報につながることを実感した。

今後は来校者の実際の声や、感じてもらえたことを数値と合わせて、年度末の評価に繋げていきたい。

委員B：授業見学をしたが、次の展開が気になる授業を見ることができた。わくわく感がある授業であった。わくわく感がある授業、そういう授業の様子は生徒が伝えてくれる。

校長：どのように根付かせていくのかは大切なこと。毎回、学校説明会に来た中学生に授業を体験してもらう。今年は、生徒との交流の機会が広がり、体験の中で本校の良さを感じ、知ってくれる人が増えることに繋がっていけばと考えている。

中学校の先生方にもう少し来てもらい、授業の雰囲気味わってもらえる機会をつくれたらと思う。

副校長：大学の広報で実施していることで、参考になる取組はあるか。

委員B：研究を見てもらうために、生徒に実際大学に来てもらったり、高校と連携協定を結んだりしている。連携協定は県内の高校と行っているが、体験した生徒が受験する人が多い。連携協定を結んで終わらないよう、両方にとっていいようにと展開していく必要がある。

委員B：進路への対応はどのようにしていくのか。保護者もそうだが、生徒も大変気になるところだと思う。

校 長：昨年度は定時制の事業で、キャリアコンサルタントに来校してもらうものがあった。キャリア形成のカウンセリングなどを一部の生徒ではあるが定期的に行ってもらった。本校では画一的な支援でなく、キャリアを見据えた支援をしたい。このような外部の専門家の方と、定期的に、一緒にサポートしていける体制ができればいいのではないかな。

職員D：本校は就職から大学進学を希望している生徒がおり、進路希望先は多岐にわたる。その生徒にあった指導を考えている。生徒それぞれが向かう方向が違うので、どのように環境を作っていくのが課題である。